



2002 年 (平成 14 年)
2 月号 (No. 681)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価 1 部 150 円

目 次

山と人と本	1
報告	
山岳編集(委) - 『山岳』訂正	6
資料・フィルムビデオ(委) - 松本市長が表敬訪問	6
三水会 - 秩父神社初詣	6
赤シャツ土曜会 - 開店休業	7
Climbing&Medicine	6
支部だより	
秋田 - 韓国の山・ハシゴ登山	8
宮城 - 泉ヶ岳・元旦登山	9
海外の山	10
『K2 (南南東リブ) 登山隊1996報告書』をめぐる係争について	11
図書紹介	12
東西南北	
俳句・上高地2001年	14
短歌・登るは遊びか	14
「同期会」について	14
短歌・四季の山	15
ボリビア通信	15
図書受入報告・新入会員	16
INFORMATION	17
会務報告	18
ルーム日誌	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時

山と人と本

織内 信彦

本会の同好会・緑爽会では、昨年の十一月二十五日、ロッジ山旅において講演会を開催し、名誉会員の織内信彦氏を招いて講演をお願いしました。この原稿は当日の録音記録をもとに、ご本人が筆を加えられたものです。

■日本山岳会入会の頃

私が日本山岳会に入会したのは、昭和十五年、私が二十八歳、今から六十一年前です。入会する前から、ルームにはたびたび遊びに行っていました。ライブライイがありましたから本を見せてもらいに行ったのです。

私は「日本山岳会の会員になる

のだったら、会の創立者の小島烏水先生に紹介者になつてもらいたい」と思っていました。ご承知の通り、小島烏水さんは日本山岳会創立メンバー七人の中の一人で、初代会長でもあります。本もたくさん出しておられて私もよく読んでいたのと、烏水先生のお宅には入会する前から何回かお邪魔し、夜遅くまで話をうかがったりした

ことがありました。そんなわけで、烏水さんの紹介で入会したので、
■小島烏水の本について

本の話に移りますが、小島烏水さんはご承知の通り『日本アルプス』四巻のほか、全集が出るくらいたくさん本を出しています。忘れもしない昭和十八年『山谷放浪記』という本を出されました。時代が時代ですから、紙も悪くて粗末な本でした。正直言つて「どうして小島さんのような方が、今頃こんな安手の本を出されるのだろう」と思つたくらいです。けれども、その本が出ると先生はすぐに私のところへ手紙をくださって、今度、本を出したから別便で送付するとあつて「お暇な折、御一瞥下されば幸甚に御座候」と候文の

ご案内だったのです。間もなく自分で包装したらしい小包で本が届いた。たいへん感激しましたね。私と小島先生とは、年で言うところ三十九歳も違うんです。それが私に本を贈ってくださる。本を開いてみると扉に「織内信彦様敬呈」と書いてある。よく「贈呈」とか「惠存」と書きますね。それを「敬呈」と書いて「小島烏水」と署名してありました。ホントに感激しましたね。

その翌年『山岳文学』という本を出されました。このときも同じように、あらかじめ手紙がきて、それから本が届く。「織内信彦様敬呈」と書いてある。小島先生はそういう方でした。私も会のためにはできるだけ働かねばと思つて今日まできました。皆さんの前で



講演中の織内信彦氏



ロッジ山旅の庭で記念撮影 (前列左から3人目が織内氏)

話しているのも、そういう気持ちの表れだと思っています。

それから、鳥水さんに『書斎の岳人』という本があります。昭和九年の刊行ですが、当時立派な本づくりで知られた書物展望社から出されたものです。糞虫の糞を縫い合わせて表紙に使った、先生の本の中でもっとも凝っていたも

のではないのでしょうか。私が愛蔵していたのは、本の見返しの部分に「雲を裂く大身の槍や秋高し鳥水」と署名されたもので、鳥水の俳句は珍しいのではないかと思っています。

鳥水没後、日本山岳会有志の編集で、『山の風流使者』が記念出版されましたが、その本の口絵のページに、私の持っていた俳句が記されている部分が転載されています。お陰で私は、その限定版の八番をいただきました。口絵の出版として「織内信彦氏所蔵本から転載」と説明がついています。これは私にとって小島鳥水先生とのご縁を繋ぐ記念すべきものと言えましょう。

■思い出の山岳会ルーム

次に、日本山岳会の最初のルームのことをお話ししたい。

最初のルームは、虎ノ門にありました（開設は昭和四年十一月）。当時はルームとは言わずに図書室と言っていました。この図書室ができるまでは、山岳会には事務所もなければ、ルームもなく、役員の自宅が山岳会の所在地になっていたのです。

それが松方三郎さん、また浦松佐美太郎さん、藤島敏男さんらが努力されて、初めて日本山岳会の拠点ができたのです。

ルームは、虎ノ門交差点のすぐ脇の不二屋ビルの三階にありました。階段を上がって三階の廊下のすぐ左側に「東京政治経済研究所」があった。そこは、臘山政道、松方三郎、浦松佐美太郎、嘉治隆一、松本重治氏ら、当時の経済学者・社会学者が名を連ねた研究所です。前の部屋が空いたから山岳会のルームにどうだろう、ということになったのではないかと思います。

うす暗い廊下に東京政治経済研究所と日本山岳会とが向かい合っていたのですが、ライブラリーと研究所、何となくそれらしい重厚さがあつたような気がしますね。

いつも夕方には幹事の人たち、角田吉夫さん（上越の山を開拓し、また北アルプス笠ヶ岳の積雪期初登をやった法政大学のOB）、立教大学OBの逸見真雄さん、あるいは田辺主計さん（ヤングハズバンドの『エベレスト登山記』の訳書を出した。日本で訳されたヒマラヤ単行本として二冊目に当たる）――

そういう人たちがきていましたが、私のような新入会員が行っても気軽に話ができる場所でした。

そのうち藤島敏男さんから「少し会の仕事を手伝ったらどうか」と言われて、やらされるようになった。幹事というのは、今でいう委員会のようなものでしょうか。それからは、すっかり日本山岳会の虜になって今日に至ったわけですね。

虎ノ門のルームは、昭和二十年五月二十五日の東京大空襲で焼け落ちてしまいました。焼けたその日に行ってみると、ビルは残っていましたが、中はすっかり焼けている。熱気の中を三階まで階段を上がって行くと、当時、出版用紙は統制になっていましたが、『山岳』や『会報』を発行するためにルームに積み上げてあつたのがまだ燃えていて、青い炎がチヨロチヨロ上がっていて、中は真っ赤でした。秩父宮が写してこられたマッサーホルンの写真などは焼けてしまい、上高地からおろしてルームに置いてあつたウェストンのレリーフも、ブロンズですから崩れてはいないが表面がすっかり焼けただれていました。そんなところ

を見届けて帰りました。

■松方さんと社会主義思想

この辺で「日本山岳会中興の祖」と言うべき松方三郎さん(第五代、十代会長)について話したいと思います。

松方さんは、松方正義(日本で最初に大蔵大臣をやった人、それから総理大臣もやりましたが、日本の国家財政の基礎を作り上げた人)の子息です。学習院から京都大学に進んで、河上肇さんの弟子になった。河上教授にあこがれて京大へ行ったという説があります。

それにしても、松方さんのようないわゆる名門の人が、なぜ、いきなり貧困の問題を追及していた河上肇さんの弟子になったのだろうか。不思議なことのひとつです。それも、ただ通り一遍の先生と学生という関係ではなくて、本当に私淑しておられたと伝えられております。

河上さんのゼミで勉強していたあるとき、先生が施療病院の話がされた。施療病院に入院すれば無料で治療が受けられるが、水だけは実費を払うことになっている。その水代が払えなくて退院してゆ

く人たちがいると、河上先生はそこまで話すと絶句された。絶句は五分も続いた。聞いていた皆もシーンとなった。松方さんも胸を打たれて、その晩、寮へ帰ると、みんな遅くまでその感動を話し合ったというんですね。

また、あるとき松方さんの次兄で、世界の名画を集めた松方コレクションの松方幸次郎さんが神戸の川崎造船の社長をしていたときに、会社で労働争議が起こった。

それを聞くと松方さんは、とるものもとあえず神戸にとんで行った。兄さんである社長の幸次郎氏を援けに行ったのかというと、そうではなくて争議本部の応援に行ったんです。そこに松方さんという人の真骨頂があると思いますね。

河上肇さんの門下生として、松方さんは評論もたくさん書いています。後藤信夫というペンネームを使っています。共産主義国家としての「ソビエトロシア五カ年計画」や「資本論」の翻訳も出ています。改造社から出た『社会科学大辞典』には編集委員となり、美濃部達吉、大内兵衛氏らと共に多数項目の執筆をされている。そこまで進んで行ったのはなぜだろ

うか、気になるところです。何が松方さんを社会主義的活動に追いつたのか、興味の深いものを感じます。(共同通信社刊「松方三郎」より取材)

■ブルジョア・アルピニズム

そういう活動をしたあと、松方さんはヨーロッパへ行く。ロンドン大学に籍を置くのですが、大学よりもつばら大英博物館で勉強していた—これはご本人がそう書いている。そしてスイスへ行つて夏のアルプスを手当たり次第登ってきた。日本を離れて三年もスイスにいて、一流のガイドを雇っては難しい山に登っている。典型的なブルジョア登山だといえます。

ちょうどスイスに滞在しているときに、ケンブリッジに留学しておられた秩父宮がアルプスに登りたいとおっしゃって、横有恒さん、松方さん、渡辺八郎さん、松本重治さんがお供をして、それこそスイスの一流中の一流のガイドを雇って、いい山登りをされて日本に帰ってきます。

ヨーロッパから帰国した松方さんは「アルプス記」という本を書きます。素晴らしい本です。

全く、アルプスにのめりこんでしまった話なんですね。

戦後間もなく、私が会報の編集者になったときに、原稿を書いていただいたり、あるいは意見をうかがったりすることがあって、当時共同通信社におられた松方さんをたびたびお訪ねしました。お正月には、松方さんのお宅に十人ばかり集まって、焼き会をやりました。そのメンバーで今日まで生きているのは私くらいではないでしょうか。

当時のアルプス登山を私はブルジョア・アルピニズムと呼んでい

登るたびに好きになる!

おかげさまで10周年!!

2002年度・総合カタログが完成!!

国内・海外の山、自然観察、秘境の旅が満載!

新コース多数設定!

ぜひカタログ(無料)を下記までご請求ください。

お問い合わせお申し込みは **アミューズトラベル**

〒160-0023 東京都新宿区西新宿1-22-2 新宿サンエビルB1
TEL 03(5325)1256 FAX 03(5325)1258
大 阪 06(6456)3366 名古屋 052(588)5617
広 島 082(502)2525 福岡 092(735)8855

ます。少なくとも戦後、社会人アルピニストがアルプスへ出かけて眼を見張るような業績をあげるまでの、それ以前の日本人によるアルプス登山は、英国人をお手本にしたブルジョア・アルピニズムといふべきものであった。横さん、松方さんをはじめ、浦松佐美太郎さん、各務良幸さん、田口一郎・二郎兄弟、高木正孝さんといった名が挙げられます。

田口二郎氏なんかも典型的なブルジョア・アルピニストですね。一郎・二郎の兄弟とも神戸の甲南高校から東大へ進み、卒業後はすぐヨーロッパへ行ってアルプス三昧。一流のガイドを金にあかせて雇ってアルプスに登った。いい山登りをしていますけれども、彼自身は、甲南高校や大学では学生運動をやって警察へ引っぱられたり、拘留されたりと体験をしています。お金持ちの子でいながらそういう経験をもって、一転してアルプスへ行くと、全くのアルプス三昧というわけです。松方さんと共通したところがあります。

■心に残る山の本

浦松佐美太郎さんには今も評価

が高い『たった一人の山』があります。その中で特に印象に残っているのは、次の一節です。

浦松さんがアルプス山麓の宿屋に泊まっていると、晩飯のあとで旅回りの手品師がやってくる。一通り手品を見せると、帽子を持って銀貨を集めて回る。そして「次

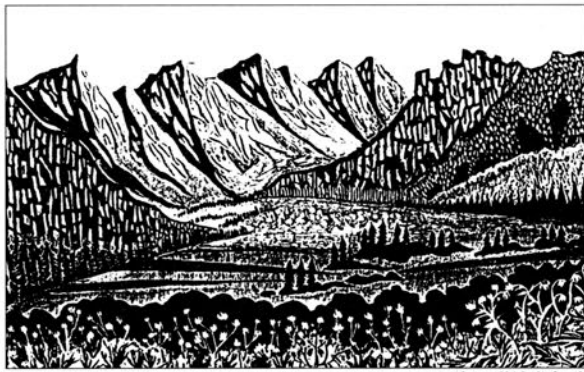


イラスト 奥野道治(溪石)

はこういう手品をします」と言つたとき、浦松さんが「それは俺も知っている」と言うんですね。手品師が「お客さん、もっといいのを教えましょう」と言う。

その夜、寝静まってから耳を澄ますと、隣の部屋で手品師が独り

言を言いながら売上を数えているらしい。そこで「ああ、自分は悪いことをしてしまつた」と大後悔悔する——という一節なんです。それを讀んだとき、いい話だなあと思わずそのページを讀み返しました。そして「これが浦松さんの、やはり真骨頂だな」と思いました。山の本で何度も讀み返した本は、正直言つてそうたくさんはない。讀み返した何冊かの中の一冊が『たった一人の山』です。

■西域へのがれ

今までの話とジャンルが違いますが、明治四十二年に出た『伊犁紀行』という本があります。著者は陸軍軍人で日野強という人です。この本は、中国の北京から西安を通つて、今でいうシルクロード——ハミとかトルファンとかウルムチから天山北路のイリまで行つて、それから峠を越してカラサルへ、今度は天山南路をカシュガル、ヤルカンド、そしてラダックのレーからスリナガルへ出るという大旅行です。それが明治四十年頃ですからね。汽車も飛行機もない時代、たった一人で歩いて行くんです。ヤルカンドからレーへ出る

には五〇〇〇呎の峠を越えて行く。この本を讀んだときは、日本人もやるもんだなあと感激しました。

しかし、それよりさらに二十年も前に、英国の軍人だったヤングハズバンドが同じルートを歩いているんですね。この人は後に英国の王立地理学協会の会長になります。日野強が大旅行を企てたのは、その記録を讀んで、それに刺激された。しかし一人で大変なことでした。ヤングハズバンドもお供は連れて行つたでしょうが、一人で

これを読んで、私もその真似をしたいと考えて、十三年ばかり前に北京へ行つて、そのルートを一人で歩きました。中国人のお供を一人連れて行きましたが、なかなか大変で苦労しました。道々ヤングハズバンドの冒険を思い、日野強の探検を思いながら歩きました。北京では天安門が騒然としていたときです。

大仏次郎のバリ・コミュニケーションにテーマにした『パリ燃ゆ』という長編小説がありますが、私は民主勢力に激しく揺り動かされる天安門広場から「北京燃ゆ」という相應しい言葉を連想しました。

■忘れられない人と本

もう一人忘れられないのは、伊藤藤愿さんと、彼の書いた本のことです。

伊藤藤愿さんは田口二郎さんの出た甲南高校の先輩に当たります。たまたま学生のころに甲南の山岳部報告を見ていると、伊藤藤愿さんが、小槍をたつた一人で登攀している。その二、三年後に私も仲間と二人でアンザイレンをして登りましたが、ザイルで結んでいると気持ちの上では安心感があります。

伊藤藤愿さんが一人で小槍を登った記録と、穂高の滝谷を単独で登り、北穂高へ出て南沢を飛驒側へ下りた。そしてまた白出谷を登って穂高を縦走したという紀行文を読んで、非常に感銘を受けました。「こういう山登りをしてみたい」と思っていたら、一、二年後、涸沢の岩小屋——今はありませんが——に私が滞在していたときに、後から四人ばかりやってきて「まだ、入れますか」と言う。「入れますよ」「じゃ、お邪魔します」と言って入ってきた。

岩小屋といっても小さいんです。中では立って歩けない。座って頭

がつかえるくらいです。話しているうちに、その一人が伊藤藤愿さんだとわかった。

「私も小槍を登ってきました。伊藤さんが打たれた正面のチムニーに入る手前のハーケンを利用して登ってきました。あれがあったのでとても助かりました」と言うのと、「あれはもう抜いてきてもらったほうがよかったかも知れない」と言われたことを覚えています。

それから天気が悪くなつて、穂高小屋へエスケープしたのですが、私は二日ほどいてあきらめて下山しました。伊藤さんはそのまま残って、結局、田口一郎さんと二人でジャンダルムの飛驒尾根の初登攀をやっています。

伊藤さんはそういう記録を残した人ですが、京大を出たときに今西錦司さんらのAACKがヒマラヤへ行く計画を持ち、伊藤藤愿さんをダージリンのヒマラヤン・クラブに派遣した。伊藤さんがクラブのセクレタリーに会うとき、入室のサイン帳にGEN・ITOと書いたものだから「ゼネラル伊藤か」と言つてすっかりゼネラルにされてしまったという、そんな話を私は今西錦司さんから聞いたこ

とがあります。ヒマラヤまで行って調査をしたり、交渉したりするのですが、時節柄、ヒマラヤ登山は実現しなかった。

やがて戦争が終わつて、お茶の水のクラブルームの屋根裏部屋で「王曜会」があつたとき、伊藤さんがひょっこり現れたことがあつた。その前にヨーロッパへ行つてマッターホルンを一人で登つてきた。これが戦後、マッターホルンへ登つた最初の日本人です。私はそのことを、島田翼会員(朝日新聞)からの通信で知つていたので、すかさず「マッターホルンのことを会報に書いてください」とお願いしたら、すぐ引き受けてくれて、とてもいい原稿をもらいました。

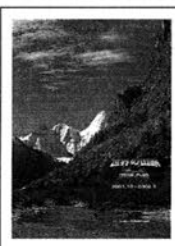
そのとき「伊藤さんとは、昭和五年に涸沢の岩小屋で、しばらく一緒にになりました」と言うのと「覚えていいますよ」と言われて嬉しかった。伊藤さんはドイツのパウル・パウアーがカンチェンジュンガに挑戦したときの報告書を翻訳しています。昭和六年です。

その報告書の中にこんな一節がありました。パウアーがシッキム側からカンチェンジュンガの東北稜を登つて行く。第七キャンプま

で行くが、あとはテントが足りなくなつてしまふ。それから先はテントでなしにスノーホールを掘る。その雪洞から頂上を狙うんですが、遂にチャンスがなくて、あきらめて総退却することになる。そのとき、隊長のパウアーは雪洞の中に持つて行ったドイツの国旗を広げて、しわを伸ばしながら退却の決断を迫られる。その場面が臨場感があつて、すばらしい名訳なんです。

ちょうど一時間経ちましたね。今日はこの辺で終わりたいと思います。(談)

●カタログをご請求ください。



▲総合カタログ



▲NZの山旅



▲日本の山旅



アルパインツアーサービス株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F TEL.03-3503-1911
大阪/TEL.06-6444-3033 名古屋/TEL.052-581-3211 福岡/TEL.092-715-1557

報告

REPORT
2月

山岳編集委員会

『山岳』図書紹介の訂正

『山岳』第九六年(二〇〇一年十二月発行) 図書紹介の「上高地―三部作」の二〇五ページ上段二〇行目(後から三行目)「ホテルも西糸屋も温泉も閉まっていた」について、西糸屋当主の奥原敦永さんから「西糸屋は昭和十九年も休業していません。石岡繁雄さんの『屏風岩登攀記』の七七ページにあります。十一月に営業していますので、夏も当然やっていましたはず」と訂正の要請がありました。

石岡繁雄著『屏風岩登攀記』の「戦時中の登山(昭和十九年)」の項の七七ページには「生家のようになつた山宿、西糸屋。四年ぶりにふれる入口のガラス戸(中略)薄暗い料理室のほうにも、人の様

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

子はないようだし、いつも主人が入れ歯をもぐもぐさせ、目をしばたかせて座り込んでいる番台にもその人の姿はなかった。しかし奥のいりりには、ほた火が赤々と燃えているのが六感でわかった。

「おばさん」(中略)「はい」と裏の大根畑から声がした」とある。昭和十九年十一月の記述で、奥原さんは「創業以来シーズン中は休業していない。人の気配がしなかったのは、裏の畑にいたのでしょう」というお話であった。

筆者は帝国ホテルと温泉、清水屋の無人は確かめたが、西糸屋は気配だけで判断し、玄関を訪れて確認しなかった。筆者の手落ちで、奥原さんの「戦争末期に休業していたと思われるのでは、先代に申し訳ない」という言葉を重く受け止め『山岳』の二〇五ページ上段

二〇行目「西糸屋も」を削除します。
(関塚貞亨)

資料・フィルムビデオ委員会

松本市長が表敬訪問

長野県・松本市で昨年の夏と秋、二度にわたり市内のアルプス記念館で開催された01世界岳都市会議開催特別企画展に、日本山岳会が全面的に協力、多数の来場者を迎え盛況裡に終了した。

十二月二十一日、主催者側を代表して有賀正松本市長らは日本山岳会のルームを訪れ、協力への謝意を表された。有賀市長は「お陰で今回の企画展は成功を収め、お礼を上げたい。さらにアルプス山岳館は、平成十九年の松本市制百周年に向けて整備を進めている。日本アルプスの玄関口である岳都松本にふさわしい施設にするため、ぜひ山岳会の皆さんにもご協力をお願いしたい」と挨拶。

当日は、大塚博美会長をはじめ企画展を具体的に推し進めてきた溝口洋三資料委員長、関次和子、大森弘一郎、羽田栄治、大蔵喜福、鰐坂青青、神崎忠男会員らが出席、訪問を歓迎した。席上、有賀市長

はそれぞれの会員へ「アルプス山岳館特別企画に関する御礼状」を手渡した。
(羽田 栄治)

三水会

秩父神社初詣と美の山

新春恒例三水会とエーデルワイスクラブ合同の正月初山行を一月五日(土)、六日(日)に実施した。朝八時西武池袋駅に集合し、秩父行き快速急行に乗車、十時過ぎ秩父駅より秩父神社へ。三が日も過ぎていてさほどの混雑もなく、朱印帳に記帳してもらう人、神社で何を祈ったか、三々五々のお参りと記念撮影。次にまつり会館を見学、秩父夜祭の勇壮さは、日本三大曳き山祭り(京都祇園祭、飛騨高山祭)のひとつとして知られているそうだ。

ここの見学中に急に天気が悪くなり、雪模様になったが、昼食の蕎麦屋を出るときには快晴となる。さらに秩父四番札所の金冒寺に参詣し、宿の車で今日の宿泊地、不動の湯へと向かう。

六日は朝食後、宿の車で美の山へ。快晴の秩父連峰と両神山、武甲山を真正面に眺めたあと、ゆっ

くりと下山。秩父鉄道黒谷駅まで徒歩、それより寄居駅で乗り換えて東武小川町まで行き、山岡鉄舟も食したという「ふたばの忠七めし」で食事、小川町駅で解散した。参加者十七名。
(樋口 公臣)

赤シャツ土曜会

開店休業の弁

ルームの第二、第四土曜の休室に端を発し、私の入院と自宅の建て替えて、九カ月間の山梨、横浜、川崎の三カ所への六回の移転、これにより会の活動がストップしてしまいました。ただし、赤シャツの製作、配布の業務は内藤幹事が受け持ってくれましたので、近く完了する目途が立っております。私は、連続歩行時間と立っている時間の合計が約五分間で、行動するときは折りたたみ椅子持参という始末になっております。そんなわけで、会員の皆さまにはご迷惑をおかけし申し訳ございませんでした。何とか再建の目途をつけ、パトンをお渡ししたいと存じますので、ご意見、お知恵がありましたらお寄せくださいますようお願いいたします。
(神谷 恭平)

Climbing & Medicine 6

高山病予防と体力トレーニング

浅野 勝己

1952年以来今日まで6000m以上の高峰登山者約1万人のうち252人が遭難死している。しかも1968年以降今日まで、毎年遭難死が連続している。

ここで改めて「43人の高峰登山者のうち1人は生還できない」すなわち2.3%の致死率である事実を深刻に再認識する必要がある。この遭難死の原因には、雪崩(49%)、転落(32%)および高山病(8%)があげられているが、これらの根底には低酸素環境による高所障害(広義の高山病)が関与している。そこで高山病予防への体力トレーニングの生理的意義について明らかにしてみたい。

高峰登山で成功を収めるためには、体力、技術、経験および精神力の相乗積である「心・技・体」が要求される。このうち体力要素は、筋力、持久力および調整力などの「行動体力」と各種ストレスに対する耐性能力である「防衛体力」からなっている。登山時にはこの両要素の体力が必要となるが、とくに寒冷や低酸素環境ストレスへの適応能力の重要性からすると「防衛体力」の比重がより大きいものと考えられる。すなわち高山病予防のためには防衛体力の向上が不可欠であ

るが、この要素の向上には行動体力要素を高めることが前提になると指摘されている。

メスナーは毎日1時間のランニングと筋力トレーニングを20年以上にわたり継続し、安静時の心拍数53拍/分、血圧105/75mmrであり、左心室と大動脈の肥大したいわゆる「クライマー・ハート」の持ち主であった。さらに、下肢筋のエネルギー生産工場のミトコンドリアの増殖が顕著であった。このような体力トレーニングの継続が低酸素環境での登山時の動脈血酸素飽和度の低下を抑え、低酸素換気応答の亢進をもたらし、高山病予防に貢献していたものと考えられる。

さらに運動トレーニングを継続することにより「血液のサラサラ度の向上」が期待でき、高山病を予防する可能性が指摘されてきている。栃木県山岳連盟ムスタグ・アタ峰登山隊(1998)でのわれわれの研究では、4400mに18日間滞在中の全血通過時間と高山病(AMS)、血色素濃度(Hb)などの関係を経日的に測定した。この結果、滞在初日はAMSは高値を示し、Hbも高値で血液はドロドロ状態であったが、経日的に減少して全血通過時間の短縮が認められ「サラサラ度」の向上と共にAMSが低値を示した。したがって登山前の鉄分補給などによる赤血球、Hbの増大はサラサラ度を低下させ高山病を発症する危険性があることを留意する必要がある。このように「血液のサラサラ度」の向上は高山病予防に貢献し、運動トレーニングの継続によりもたらされることが明らかにされている。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況
をレポートします。

秋田支部

韓国の山・ハシゴ登山

平成十三年度の秋田支部海外交流登山は、台湾の大霸尖山に決定していたが、台風災害で中止となり、急遽韓国の山に変更した。参加者は五名。

秋田・ソウル間定期便の就航が決定していた矢先であり、その記念すべき第一便に合わせて計画を立て、水安堡温泉をベースとして俗離山、月岳山、鳥嶺山、小白山の四山を、十月三十日から一週間の日程で実施した。

第一日、秋田空港より仁川新空港へ。曹斗鉉、李載洪両氏の出迎えを受け、市内観光のち宿泊先

のYMCAホテルへ。

第二日、李載成氏一行三名と共に車で俗離山（一〇五七㍎）へ。同山は俗世を離れるとの意味を持ち、韓国八景のひとつとして観光に優れ、古くから第二の金剛、小金剛とも呼ばれている。

今回は前年とは反対に、裏側の上五里からの静かなコースをたどり、文蔵台を経て化北里に下山した。快晴のもと、天王峰から文蔵台へ稜線上に連なる奇岩怪岩の織り成す風景は圧巻であり、多くの中年登山者で賑わっていた。湖と温泉のある保養地・水安堡温泉の新興ホテルに宿泊。

第三日、李氏の友人、金氏の車



俗離山・天皇峰で

で月岳山（一〇九三㍎）の登山口、松界里まで送っていただく。同山は山頂部が大岩壁を成し、小白山脈一帯の霊山の主峰である。険峻な深山幽谷を抱き、岩登りブームの頃は、数多くの遭難があったという。

集落を過ぎると急登の連続となるが、整備されている道は登りやすい。山頂へは大岩壁を回り込み、裏側を登って行くが、落石防止や鉄階段などが整備されており、安全にたどることができる。予想外に登山者は多い。一気に切れ落ちる大岩壁、山頂からの眺望と徳周寺谷への下山途中から眺める大岩壁の迫力は壮観である。

第四日、登る予定であった太白山はこの地から遠く、李氏推薦の鳥嶺山（一〇一七㍎）に変更する。

新豊里から不明確な道をたどり、稜線上に連続する岩峰群を登って行くのだが、難所には古いロープがある程度で、一般コースではない。岩壁や岩峰に連なる松が見事に調和しており、まさに一幅の絵であった。

晴天のもと、山頂からは月岳山も遠望できる。李氏が名付けた神仙岩を経て水玉瀑布へ下山したが、

足場は悪く健脚者向きである。

第五日、ようやく確保した白タケで小白山（一四三九㍎）へ。早朝のためか喜方寺まで乗り入れることができた。整備された道を蓮花峰へ登る。途中、小雨から小雪に変わり心配されたが、蓮花峰からは高曇りとなり、澄み切った美しい山岳パノラマを満喫しながら小白山頂に至った。道々、崩落防止の延々と続く階段に感心させられたり、行軍中の百名以上の空挺隊と出会ったりした。私は小白山には三十年前にも登っているが、当時の面影はなく、すっかり変貌していた。

帰路は長い林道をたどって天働洞へ下山。宿泊先の新興ホテルはキャンセルされており、運転者宅に泊まらせていただく。

第六日、バスで忠州市を経由してソウルに帰着。鐘閣やソウル駅周辺を散策し、夜は李来城氏をはじめ元老会の皆さまから料亭で歓迎会を開いていただく。YMCAホテルへ宿泊したが、連日連夜のマッカリ漬けにも疲れをみせず、さすが秋田人。

第七日、李載洪氏の案内で仁川新空港を一周、規模の大きさを実



初日の出を泉ヶ岳で迎えた宮城支部の会員

宮城支部

元旦登山・泉ヶ岳

仙台市街から見える小さきまな山の中で、市民にとつても身近な山と言え、なんと言つても泉ヶ岳に違いない。いつからか宮城支部には、元旦登山はこ

感する。芍薬島遊園地で海鮮料理をご馳走になり、夕方秋田空港着、解散した。

最後に、実施にあたりお世話くださった曹斗鉉氏はじめ韓国山岳会の元老会に心から感謝の意を表します。
(佐々木 民秀)

の泉ヶ岳で行うという一つの慣例があつて、それが連綿と今も続いている。

毎年、年が明けると、会員それぞれが朝早くからお神酒を携え、日の出の六時五十分頃頂上に到着するよう、各自、時間、体力などを自由に調整して登りはじめるのである。頂上には、会員の誰かが必ずきているので、寒さに震えながら、一人寂しく新年を迎えるということはない。

さて、今年は少し趣を変え、佐藤宗行、飯塚とみ子両会員とともに、大晦日の午後早く仙台を出発して、中腹の水神でテント泊することにした。

泉ヒュツテから約一時間三十分夏には格好の休み場としてにぎわう水神も、今は積雪一層ほど、北風が吹き付ける冬景色のさなかにあつた。早速テントを設営して、年越しを久々に山で過ごした。

二〇〇二年元旦、水神を五時出発。既に何組かのパーティーが登つて行ったようだ。岩場を過ぎ、賽の河原にさしかかったあたりで、空が次第に明るさを増してくる。頂上には日の出前の六時三十分頃着いた。

頂上に鎮座する山の神などに参拝していると、他のパーティーも続々と登ってくる。その間に当会会員が一人、二人と顔を見せはじめる。毎年、欠かさず登り続けている千石会員はもとより、今年初めて参加した会員、あるいは遠方から駆けつけてきた会員等々、今年には全部で十七名になった。

引いたのだろうかとか心配したり、会員以外の人との思いがけない出会いがあつたり、今年もまた、頂上一帯ではいつもながらの元旦風景が続いた。

ところで、肝心の初日の出はどうと、例年は見えないほうが圧倒的に多いにもかかわらず、今年はそのが見えた。松島の南の海上に真紅の影を落として、ゆっくり立ち昇る様子が、とても鮮明に見えた。幸い多い年であれ、と祈らずにはいられない。二〇〇二年、恒例の泉ヶ岳元旦登山だった。

(三宅 泰)

6,000m以上の1,215峰を全て所収 世界初の精密登山地図 完成!!

宮森常雄 著 (ヒンズークシュ・カラコルム研究会)

カラコルム・ Mountaineering Maps
ヒンズークシュ of the KARAKORUM
登山地図 & HINDU-KUSH
by Tsuneo Miyamori
B全判地図13葉

(付)カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究 (宮森常雄 雁部貞夫 共著)

A4変型判・上製美装ケース入 385ページ

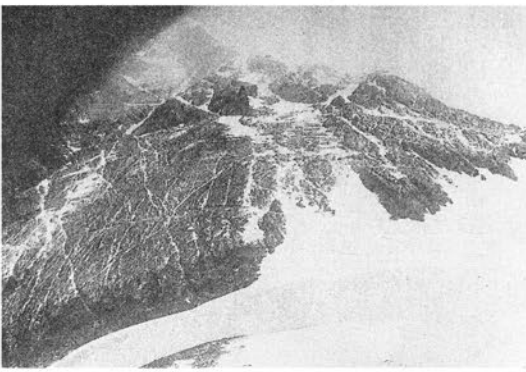
◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

国内外の多くの登山家・探検家による最新情報を刻み込んだ世界で最も詳しい登山地図がついに完成! 全て経緯度を位置付け、既登峰・未登峰を明示。氷河地帯の知りうる限りの情報も満載。別冊山岳研究では貴重なパノラマ写真に高度と山名を添えて掲載。現地言語による地名山名研究と併せてヒマラヤ全域の知識を提供する。

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>

海外の山

サウスコルから
空ボンベが消えた？

エヴェレスト・サウスコル (’88三国友好登山隊報告書より)

エヴェレストのサウスコルといえば、近年は、使用済み酸素ボンベが多量に放置されたままの「八千坪のゴミ溜め」という印象がもたれたが、どうやら様子が変わったらしい。

人気ウエブサイト「エヴェレス

江本 嘉伸

ト・ニュース・コム」によると、エヴェレストに連続登頂しているアメリカの登山家、ポール・ジョルジオが「サウスコルにはもう空のボンベは転がっていない」と証言したのだ。ジョルジオは、二〇〇〇年五月二十四日、二〇〇一年五月二十三日、ともにネパール側東南稜ルートからエヴェレストに登頂している。二年続けて登頂しているのは、山頂のスノーキャップ、岩の真の頂上に堆積している雪の厚さを計測するという、科学調査の仕事のアシストをしているからだ。

その最新の体験で、ジョルジオたちは「少なくとも二〇〇一年五月二十三日に関しては、第四キャンプ（サウスコルのこと）周辺で、使用済み酸素ボンベは見つからず、シェルパたちが担ぎ下ろすものはなかった」と証言しているのである。

古いものは、コルのどこかに埋まっていたり、岩陰で見つからなかったりしたかもしれないが、あの八千坪のコルが空ボンベのゴミ溜めでなくなったとしたら、ヒマラヤ登山のレベルが少し上がった、

た、とわかっていいだろう。頂上に立つても立たなくても、どんなに疲労困憊していても、各国の登山者たちは、「ここにボンベを置き捨ててゆくわけにはいかない」という共通認識を持つに至ったのだ、と思いたい。そういう、高所での環境問題への意識が、シェルパたちの理解と協力で「ボンベの墓場」を解消したとしたら、やはり嬉しいことだ。

ただし、喜んでばかりもいられない。テント、食料コンテナ、ガス・カートリッジのような生活ゴミは相変わらず残っているようだ。形態的にも美観からもある意味でボンベは運び下ろしやすいのかもしれない。

ところで、ジョルジオたちは、ことし二〇〇二年春もエヴェレストをめざす計画だ。山岳写真家、探検家として知られるブラッドフォード・ウォッシュバーンが中心となつて進めているこの調査、ボストン科学博物館が支援している。ステンレススチール製の、重さ一・三キ、長さ九〇センチほどのポール四本をつなぎあわせ、四本目にとりつけられたアイスクリューを下

リルのように回転させて頂上の雪氷に穴をあけ、厚さを計測するのが、ジョルジオの仕事である。

今回は、それに加えてもうひとつの目的として「ヒラリーたちの最終キャンプを探す」ことがある。そうだ。一九五三年五月二十九日、英国隊のエドマンド・ヒラリーとテンジン・ノルゲイがはじめて山頂に立った時、最終キャンプは「前年のスイス隊の最高到達地点の少し下」に張った。スイス隊は八五九五坪に達しているから、そのすぐ下あたりであろう。

ジョルジオは、エヴェレストに張られた史上最高のキャンプは、おそらく今の一般ルートとは離れた場所だった、と考え、その位置を、可能であればテントの残骸など遺留品も含めて、さがそうと思いついた。ウォッシュバーンを通じて、ヒラリー卿の了解も得た。四十九年前のアタック・キャンプの場所について説明も受けたという。ジョージ・リー・マロリーの七十五年ぶりの衝撃的な発見を機に、ヒマラヤ登山史に新たな「考古学的テーマ」を設定する動きが出てきた、と言えるかもしれない。

『K2(南南東リブ)登山隊1996報告書』 をめぐる係争について

平成十一年五月、日本山岳会青年部より『K2(南南東リブ)登山隊1996報告書』が発刊され、その終章の「総括」において隊長であった山本篤氏が遠征当時の日本山岳会副会長、宮下秀樹氏の個人名をあげた批判記述を掲載し公表した。宮下氏に関する記述の内容は同氏が本会が行った「88年チョモランマ隊」「90・91・92年ナムチャバルワ偵察隊及び本隊」「95年マカルー東稜隊」さらには本件の「K2隊」に対して様々な妨害活動を行ったというものであった。

これに対して本会の関係者を中心に打開策を模索したが、解決策を見出せず最終的に宮下氏は名誉回復のため平成十二年一月山本氏を相手に「名誉毀損の損害賠償請求」訴訟(慰謝料の請求と謝罪広告等の請求)を東京地方裁判所に起こした。

東京地裁は、平成十三年四月「原告(宮下氏)の請求をいづれも棄却する。訴訟費用は原告の負担とする」との判決を下した。

宮下氏はこれを不服として東京高等裁判所に控訴し、東京高裁は平成十三年十月、K2隊以外の五隊については名誉毀損を認めた一

部逆転の左記の判決を下し、このほど確定した。

会報担当理事 今村 千秋

「判決主文」

一、原判決を次のとおり変更する。

(一) 被控訴人は、控訴人に対し、社団法人日本山岳会が発行する「山」誌上に別紙1「謝罪文」のとおり謝罪文を掲載せよ。

(二) 被控訴人は、別紙2の書籍目録記載の報告書を第三者に配布、販売するときは、別紙1「謝罪文」のとおり謝罪文を同報告書に添付しなければならない。

(三) 控訴人のその余の請求を棄却する。

二、控訴費用は第一、二審を通じて、これを四分し、その一を被控訴人の、その余を控訴人の負担とする。

これに対し、宮下氏、山本氏ともこの判決を受け入れ、このほど判決が確定しました。前掲判決主文(一)で命じられ、山本氏がこれに従ったものを以下に掲載します。

別紙1

謝罪文

私は、一九九九年五月三十一日発行の『日本山岳会青年部K2(南南東リブ)登山隊1996報告書』一八〇ページにおいて、社団法人日本山岳会前副会長宮下秀樹氏が88年三国チョモランマ隊、90・91・92年ナムチャバルワ偵察隊及び本隊並びに95年マカルー隊に対して妨害活動を行った旨を記述しました。

しかし、上記記述は真実に反するものであり、これにより宮下秀樹氏の名譽を毀損いたしましたので、このことを深くおわび申し上げます。

平成十四年二月二十日

山本 篤

別紙2

書籍目録

書名	発行年月日	発行行	発行者	編集者	ページ数
日本山岳会青年部K2(南南東リブ)登山隊1996報告書	一九九九年五月三十一日	日本山岳会青年部K2登山隊1	山本 篤	松原 尚之	一九八ページ

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

長尾三郎・著

『激しすぎる夢』

「鉄の男」と呼ばれた登山家・小西政継の生涯、という副題を持つ。一九九六年秋、マナスルで消息を断つたとの報が小西夫人に電話で伝えられる場面がプロローグとなり、やがて時をさかのぼって一九六九年に小西と植村直己がエヴェレスト南西壁に挑む劇的な場面へと変わる。こうして一九六〇年代後半から三十年余の「鉄の男」の情熱的な山岳人の半生が、プロローグの場面に戻るところまで多くの資料をもとにして組み立てられていく。

在野の山学同志会に属した小西

を日本山岳会のエヴェレスト遠征隊に推挙した佐藤久一郎は小西より四十歳近く年上で人情味のあつた老人の役。そして冒険心に富む植村直己が同年輩のライバル兼友人の役。その他、多くのアルピニストたちが脇役をつとめて、主人公を中心とする多彩な人間模様が、登山活動を随所に織りまぜて描かれていく。いかにも演劇志望の青年だった筆者の面目を示す構成となっている。

こう言うと、この小西伝がノンフィクションの衣をかぶったフィクションの物語であるかのように思われかねない。だが、筆者は決して過度の感情移入に走らず、作りごとを排除して、さまざまなドキュメントの相互の関係を確かめることに力を注いでいるように見える。そこには、アルピニストたちの世界を観客席から見つめるといった視点が働いていて、小西をかこむ登場人物たちを等距離に眺める公平さが保たれる。

植村直己と加藤保男の冒険と死を既に発表している筆者が、異色の劇作家寺山修司の人と作品を書いた人でもあるという事実は興味深い。社会の支配的な規範を闘争

の対象とすることによって自分を意識的にアウトサイダーの立場に追い込む一方で、根は人なつこく愛すべき人柄——そんな人物たちに注がれる筆者の視線そのものに温かさが宿っている。これが良質なノンフィクションとしての小西伝を生んだ。

(宮下 啓三)

二〇〇一年八月 山と溪谷社発行 四四六ページ 千七百円

根深誠・著

『白神山地立入禁止で得するのは誰だ』A

『白神山地ブナ原生林は誰のものか』B

白神山地は世界自然遺産登録後、指定地域全体を核心地域と緩衝地域に分け、さらに核心地域を入山禁止地域と規制地域に区分している。登山を目的とする入山は、規制地域内に指定された27ルートに限り、許可を取得すれば入山することができ。

この措置に対して著者は真つ向から反対する。

A書には、著者と立入禁止・規制側(営林署・弘前大学教授・白神山地NGO会議)との対論が所収される。

禁止・規制側は理由として「遺伝子の貯蔵庫」だから人が入ると遺伝資源を損なう。釣り人によるイワナの減少(営林署)。異常気象によるオーバーユースとゴミの散乱(弘前大学教授)。立入禁止の推進(白神山地NGO会議)を挙げ

る。これに対し著者は、ブナ林は地元住民が利用していたところだから住民を締め出すのは理不尽。指定地域周辺で続くブナ伐採を止めずに、木の伐れない地域を立入規制しても何の解決にもならない。世界遺産委員会の「運用上のガイドライン」では「人間の利用を排除するものではない」としている。その他を挙げる。

この他にA書では、かつて青秋林道阻止を共闘した白神山地NGO会議が、立入禁止側についた実態を明らかにするほか、B書では世界遺産のブランド性に便乗する人々の実態や、著者の基本理念である「自然との共生」その他を論じている。

本書は自然保護を考えるうえでの名著であるが、禁止・規制を外した場合オーバーユースにどう対処したらよいのだろうか。

(山田 哲郎)

各冊二〇〇一年十月 つり人社
発行 各二三九ページ 千六百
円

橋本 廣・著

『富山ヒマラヤ百年の記録』

一九七六年に橋本さんは私家版の『ヒマラヤをめざした越中人たち』を出した。これは地元の北日本新聞に連載した記事をまとめたもの。それから四半世紀、ヒマラヤをめぐる諸情勢も登山も大いに変わり、登山史にも数多くの記録が書き加えられることになる。本書は前著の『越中人たち』以降、さらに新聞紙上に書いたものをまとめた『百年の記録』とした新書。五度にわたって書いた百四十七回の記事を一書したという。

登場するのは題名のとおり、富山県の在住者と出身者、その他の県人関係者である。明治三十五(一九〇二年)の堀賢雄(中央アジアの第一次大谷探検隊)、石崎光瑠画伯のダーズリンからサンダクフ(大正五―一九一六年)とカシミールのコラホイ登山からはじまる。そして本格的な登山は堀田弥一(立教大学のナンダ・コートと日本

山岳会の第二次マナスル隊)、京都大学隊のアンナプルナIV峰とチヨゴリザの藤平正夫と脇坂誠を嚆矢とする。

一九六九年のネパールの登山解禁直後、グルジャ・ヒマールの初登頂が行われる。これは県内で組織された最初の登山隊であった。それ以後は県内の単独登山隊、あるいは他府県のグループに加わっての遠征が次々と続く。橋本さんは参考文献をあげて、それらを実に丹念にまとめあげる。その博覧強記ぶりにはただ脱帽するのみ、詳しいことは本書にお譲りしよう。しかし、山麓のトレッキングと登山との区別をしつかりしなければ、記録の迷路に入りこんでしまう。その点、日本ネパール協会が『ネパール・ヒマラヤ探検記録』(講談社、一九六七年)をまとめた時点が旅行やトレッキングを『記録』として取り扱う限界であった、と当時の調査員の一人として筆者は私考している。ただ歩いていくだけのカラパタールやゴキョ・ピークを記録として加えるかどうか、今後の課題であろう。いつもあとでほぞをかむのだが、書物には誤植はつきもの。川喜多

次郎など、人名にもつと神経を使つてほしかった。『山岳』は日本山岳会の年報であつて、会報ではない。ネパールとブータンの間の『ジッキム・ヒマラヤ』(一一六と一二〇ページ)の怪峰ジャヌーにはネパール政府もビックリしているだろう。『シェルパ』になつたバキスタンのバシールも同様か。ついでにもうひとつ。山々の位置がおおよそわかるヒマラヤ地域の地図が一枚挿入されていたら、さらによかつたと思う。

(薬師 義美)

二〇〇一年十二月 北日本新聞
社発行 三四四ページ 千八百
円

フォスコ・マライーニ写真展図録
『イル・ミラモンド——
レンズの向こうの世界』

人類学者、東洋研究家、大学教授、詩人、登山家、写真家。本会名誉会員のフォスコ・マライーニ氏を紹介する名称は多様でひとつに絞れない。

この図録は、フィレンツェ在住の氏が、蔵書七千五百冊と写真二万五千枚を同市にあるヴィッシュエー文庫に収められたのを機に、イ

タリア各地で開催された写真展のために作られた。

同展は「日本におけるイタリア二〇〇一年」の関連行事として、昨年十一月八日から十二月四日まで東京都写真美術館に巡回したので、図録もイタリア版に日本語訳文を加えて販売された。図録には三百三十余枚の写真が載るが、日本展はほぼ半数の百七十余枚にまとめて展示された。

内容は、一括りにできない氏の多面的な関心と広範な足跡を反映していて、写真展構成、図録編集には大変な労力が費やされたと推測する。しかし最終的に風景にしる人物にしる、相似する題材を国や地域にこだわらずに並置すること、その難問を解決している。

たとえば、会場では二枚を寄せて並べ、図録では見開きの左右に置いて作者の意図を伝えるのである。こうしてページを追っていくと、いつの間にか氏の視線がこちらに移ってくる面白さを感じる。

(杉本 誠)

イタリア版二〇〇一年三月、日本版同十月 パリアイ・ポリス
タンパ発行 三六〇ページ 二
千円

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、原稿は長すぎないようにお願いします)



俳句

上高地二〇〇一年

畑中 耕一

白樺の露動きけり立翅蝶
たまゆらに岩魚が影の清水川
啄木鳥や又四郎谷の木遣り歌
竜胆や奥又白の水青く
雪煙る穂高の峰や影ひとつ
降る雪や化粧柳の春を待つ

短歌

登るは遊びか

大橋 克也

山麓のこんにやく畑より会釈する
老婦に笑みてすれ違えども
裾野廣き蕎麦畑の農に声交わす登
るは遊びと問いつ思いつ

「同期会」について

村山 裕嗣

その存在自体がどんどん増殖中にもかかわらず、その割には正面切って語られること(例えば「山」紙面上においても)のなかった「同期会」について当初の成立の経緯から、その後、そして現況を踏まえた行く末について、事実から私的意見まで、今年結成十年目を迎える「同期会」一期生の一人として、半ば責務めいたものを感じながら紙面をお借りします。

九三年四月十八日、総務委員会主催の新人会員歓迎と交流のさくらハイクには、新入会員七名、総務から八名、非会員十三名が参加しました。コースは飯能から天覧

―多峰主―巾着田へ至るものでしたがその途次、確かゴルフ場脇の桜の木の下で、簡単なミーティングが持たれました。その折坂本正智委員より「……当会は今まで大山岳部のOB主体だった関係上、新入会員は各大学を軸にした縦の繋がりが強かったため、ここらでそれを輪切りにした横のつながりを持つ、たとえば同期会のようなものを組織したらいかがだろうか……」との提案があり、新入会員一同「ウーン」としばし沈黙があったので、つい私が「ではやってみましょうか」と口に出し、すぐその場で会員番号の若いほうから四人の方に準備・発起人をお願いしました。

その後総務のご協力で、とりあえず首都圏の同期の方を抽出していただき、同期会発足の旨、参加の可否および会費などを認めて発送しました。そのうち、賛意と当日都合のつく方が六月二十八日に山岳会のルームに集まり、これが発足式となりました。

最初の山行は翌九四年二月に扇山。この年のうちには後続の「ジャック93」の活動が人に知られるようになり、それとは対照的に私

たちはなぜか沈滞化。そのうち同期会員の某女史より連絡が入り「92同期会は会費を集めておいて一回山行を行ったきりで、その後連絡がないのがなにか、という電話が会の事務局のほうにあったと聞いた。しつかりしてよ」という内容。岡目を決め込んでいた私もこれでまた駆り出され、その某女史を含めた幹事の方々と会い、次回の山行、そして今まで控えていた「山」への掲載など、対外的アピールとそれに伴う活性化を皆で約しました。爾来丸二年空白のあった九六年春以降、年二、三回の山行と懇親会を熱心な幹事方のお陰で続けてきております。

と、これまでが私たちの来し方ですが、各年次同期会はその後も着々と結成されております。ある時ふと思ったのですが、このまま「同期会」が増え続けていくと一体どうなるのか。この何年かの春秋の「山」の末尾のページにひしめく各会の山行案内を見て、これは何とかしなければと思ったのは決して私だけではなく、とりわけ諸先輩・山岳会幹事の方々に多いのではないでしょう。

そこで私の提案ですが「同期会」

瘦尾根を踏みしめ陽焼けせし膝も靴に隠れし肌に近づく

神宿る飯豊の尾根に別れの夜大熊座仰ぐ峙つくりて

コンパスの針の振幅定まらず霧に迷いし掌の震えいて



短歌

四季の山

逸見 征勝

田の雪をとかす手立てに堆肥まくこの山里の春は霧雨

低き木も斑雪もかける山腹の桜につどふ暮れの日ざしは

わたりきて霧おのずから染まりけり原に群れ咲く擬宝珠の色に

しらびその林にまじるナナカマド極まれる朱のしなやかな揺れ

雪被く一切経とふ山のうへ絹雲となり神の舞ふ暮れ

は十年で解散、としたらいかがでしょう。とすれば会の数は最多で十。未熟で無知だった(いまでもそうですが)自分の経験から、ほとんど知己のいなかった入会当時より年を経ることに人を知り、知識も実践も増えていく揺籃も含め、およそ十年の歳月があれば人も付き合いも大体仕上がります。要はこの解散によって会がいったんほぐされるわけですが、中の意思ある個体はそれなりにまとまり、静かなOB会でも立ち上げればよいと思います。

ボリビア通信

ユンガスは桃源郷?

増山 茂

ユンガスとは谷とか溪谷とかいう意味。ボリビア・アンデスの東のレアル山脈が豊かな降雪と氷河を抱えるのは、アマゾンからの湿った風を直接受ける屏風となつてゐるからだ。逆に言うと、極寒乾燥の高地レアル山脈から一〇〇キロも下りてゆくと、そこはすでに熱射湿润、ほぼ海拔ゼロに近いアマゾンであるということだ。

凍った高原は豊かな降水に削られてゴルジュを作り、やがて流れて緑の溪谷、地味豊かでなだらかな丘陵を形作る。そこには凍えもしなければ暑くもない、カラカラに乾くでもなければジメジメして蚊に悩まされることもない桃源郷があるというのは、ラパスに住むボリビア人の信仰みたいなものである。シゲル、ユンガスだよ。何もしなくていい。一晩川の流れを聞きながら過ごすだけでいいんだ、とボリビア山岳会の会長カルロスが誘いにきた。

われわれが行くところはウンデユアビ川沿いのチョココというところ。ラパス—コロイコ道路が完成するまでは、このウンデユアビ川沿いのトレイルが北からの農産物の主要搬入路であった。

トレイルはコロイコへの舗装道路から別れ、アンデスの高原からゴルジュ帯を急降下、谷はまだ深いが流れはようやく平らになるところまで一気に下る。ここに一群の建物倉庫群がある。関所であつたという。標高二三〇〇呎。下流から上がってくれば急登に備えて休憩し、乗りものや動物をかえることになるだろう交通の要衝。

ウンデユアビ川中下流はティワナコの時代から聞こえた最大のコカの栽培地であつた。時代は下つて金鉱ラッシュの谷でもあつた。ここに関所が置かれたのもむべなるかな。もちろん今や廃墟となつてゐるのだが。チョココはここから標高で三〇〇呎ほど下つてチョココ川が右岸から入ってくる地点にある。その昔、この地域の山林大地主兼鉱山王がここに小さな城を建てたのである。

このお城に泊まつて次の朝八時、二キロほど下つた地点のチュリ・ウマーニから南の稜線を目指す。三

ワインを直輸入しています

主にフランスはブルゴーニュのワインを中心に輸入しています。こだわりの無名ドメーヌを発掘!! 今、ワイン界に新風を送っています。SO2の少ないピュアなおいしいワインを、毎年フランスに行きドメーヌから直接買いつけています。素晴らしいおいしさです。ぜひお試しください。全国発送いたします。ホームページをご覧ください。
<http://www.winedou.co.jp/>
トップコンテンツのマキノレポートは山とワインのレポートです。メールマガジンもよろしく。

マキノ酒店有限会社 牧野 菊生
(会員8299番)

千葉県印旛郡富里町日吉台5-10-7
TEL: 0476-93-2200
FAX: 0476-93-7548

●日本ソムリエ協会関東支部ワインアドバイザーコンクール入賞 ●フランス食品振興協会(ソベクサ)認定コンセイエ(小売店のソムリエ) ●ワイン総合研究所公認名譽ワインマスター

七〇〇くらい山の峠に出れば、逆サイドから見ることになるムラータ(五八八八)が素晴らしい。低い灌木の中、最初からジグザグの急登が始まる。つらい。吐き気がする。カルロスも腰痛がぶり返してきたと言う。二人とも体調は最悪。朝からどんよりしていたが、九時過ぎには大粒の雨が落ちてきた。腰痛には冷えがよくないし、ここで戻ることにした。

昨日午後二時頃、車でチョコに着いた。近くの溪流を散歩して部屋で一休み。庭でバーベキューの準備をしながらセルベッサ(ビール)を飲み始め、ミディアムに焼いた牛のリブ肉半身を切り分けながらワインになり、脂だらけの手でバナナの葉でくるんだトローチヤ(鱒)を焼いているとテキーラが出てきて……、部屋に帰ったのが十一時頃。

かくしてユンガス・ハイキングは二五〇〇で敗退となった。

泊まっているところを城と言ったがまさにその通りで、ウンデュアビ溪谷とチョコ谷を見下ろす合流点に立つ。こんな山の中に、と思うほど場違いな、地下を入れると五層の石作り建築。百年以上も

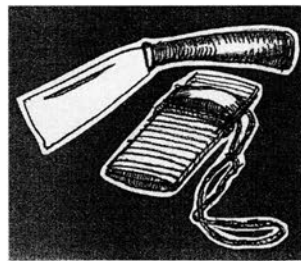
前に造られたのだという。三十年ほど前にアントニオの一族(一九五二年の革命で八〇%は失ったそうだが、いまなおこのあたりの山林六〇〇エーカーを所有しているという)が元ボリビア大統領から購入した。アントニオは前のボリビア山岳会会長、スキーの大回転でサラエボ・オリンピックに出たことがある。

ユンガスは本当に桃源郷だったかつて? 確かに山肌の緑はエルアルトではお目にかかれないうし、深い谷際立つゴルジュを流れる溪流の泡立つ白きは美しい。湿った空気はのどに心地よい。でも正直に言うと、南アルプススーパー林道の脇に立つ朽ち果てつつある大温泉ホテルといった感じが。プールの木といった亜熱帯の植生が見られることを除けば、日本の奥まった山ならどこでも見られる光景であった。なぜ彼らはあんなにユンガスに肩入れするのであろう。ラパスから二時間でこの亜熱帯環境までくることを思えば、激変度は確かに大きい。でもヒトの考える桃源郷の概念など所詮生育環境の制約を免れ得ないのだろう。

図書受入報告 (2001年12月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
菊地俊朗	釜トンネル:上高地の昭和史	191pp/19cm	信濃毎日新聞社	2001	著者寄贈
平山善吉	南極・越冬記: A Story of an Antarctic Wintering	363pp/22cm	連合出版	2001	著者寄贈
福岡大山岳部・山岳会(編)	アルピニストの50年:福岡大学山岳部創部50周年記念誌	105pp/26cm	福岡大学山岳部・山岳会	2001	発行者寄贈
手塚宗求	山-孤独と夜:小さな山小屋に暮らして	285pp/20cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
小林泰彦	日本百低山	247pp/24cm	山と溪谷社	2001	出版社寄贈
斎藤一男	日本の名山を考える	299pp/27cm	アテネ書房	2001	出版社寄贈
橋本廣	富山ヒマラヤ百年の記録	344pp/21cm	北日本新聞社	2001	出版社寄贈
Peter Grauss et al.	BERG 2002 (Band 126)	320pp/27cm	DundO Alpenverein	2001	出版社寄贈
Bruce White	New Zealand Alpine Journal 2001 (Vol.53)	128pp/25cm	New Zealand Alpine Club	2001	発行者寄贈

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆檜原都民の森・自然観察会

自然保護委員会

三頭山のブナ林を歩きます。

日時 三月三十一日(日)

場所 東京都檜原村都民の森

集合 JR八王子駅南口九時

参加費 バス代二千五百円

定員 二十名

申込 ハガキまたは電話、ファックスで三月二十九日までに

氏名、住所、電話番号を明記の上、川越尚子宛(〒一

八五・〇〇一一 国分寺市本多三・七・三二)

◆高尾の森「植樹祭」のご案内

自然保護委員会

*申込者に詳細案内書を送ります。

広葉樹を中心に千五百本の苗木を用意します。植樹祭の後にはト

ン汁で乾杯。ご家族、友人など誘

いあわせてご参加ください。

日時 四月十四日(日)

集合 裏高尾小下沢旧八王子市野

営場十時

JR高尾駅北口発小仏行き

バス(八時、八時三十分、

八時五十三分)で十五分「日

影」バス停下車、小下沢の
流れに沿って徒歩四十分。
(乗用車での来場は不可)
持物 作業手袋 弁当
参加費 一人五百円(高尾森づく

りの会会員、子ども、学生

は無料)

募集人数 三百人(定員に達し次

第締め切り)

申込 氏名、住所、電話、ファッ

クス、メールアドレスを添

えて、山川陽一宛(Fax〇四

二・三七四・七二六五)

IAChkanonori@aol.com

◆第4回「森の勉強会」(予告)

東海・京都・関西・岐阜支

部・自然保護委員会共催

森林の自然保護を志す者が、保

護すべき対象を科学的に正確に把

握し、総合的な理解を持つための

森林生態学の講義と原生林での野

外実習です。(詳細は三月号に)

日時 五月十一・十二日

定員 主催四支部以外十名程度

費用 二万四千円

◆足利行動山親睦ハイク

97同期会

「関東の高野山」と呼ばれる行動
山から歴史の町足利市の展望を楽
しむ親睦ハイクです。同期以外の
方もふるつてご参加ください。
日時 四月六日(土)

集合 東武伊勢崎線足利市駅十時

(東武浅草駅七時五十八分

準急伊勢崎行き)

行程 足利市駅→月谷分校→浄因

寺→行動山→両崖山→足利

市駅(約四時間四十五分)

申込 ハガキで三月末日までに日

本山岳会事務局・97同期会

メールボックスへ。

問合せ 池谷健(TEL・〇四二・三

六六・二四八五)

◆魚沼六日町周辺を歩くスキー

参加者募集

春の陽光を浴びてクロスカント

リー・スキーを楽しみます。ボー

ゲン程度のスキー歴があればOK。

期日 四月十二(金)〜十四日(日)

宿泊 新潟県南魚沼郡六日町六日

町温泉国際YH(飲酒可)

費用 二万円(レンタルXCスキ

ーあり 二泊五食)

申込 三月十一日までにハガキ

＊申込者には詳細を送付します。
◆春のお花見山行 つくも会
春風に吹かれながら歩きません
か。どなたでもご参加ください。
日時 四月十三日(土)

集合 JR中央線藤野駅改札口九

時

場所 陣馬山から景信山

申込 四月七日までに柴山信夫宛

(TEL〇四四・九〇〇・三四三

九 携帯〇九〇・八三三一、

四二二二)

あなたの「おもい」や「感性」を「カタチ」にしませんか。

—編集・制作のプロ(JAC会員)が直接お手伝いします—

山行記録集をはじめ、紀行・随筆・歌集・句集・詩集・写真集・記念誌などを、お望みの形や様式でつくれます。まずは、お気軽にご相談ください。

・四六判(天地168×左右127mm)並製本			・写真集 変型判(天地200×左右220mm)並製本		
200冊	500冊	1000冊	200冊	500冊	1000冊
128ページ	68万円	78万円	56ページ	108万円	149万円
		87万円		149万円	186万円

詳しい資料をお送りします。お問い合わせ・お申し込みは—

Tel.075-212-1320 Fax.075-212-1321
E-mail work@skyblue.ocn.ne.jp

編集プロダクション(竹内康之 会員No.10025)
TAKEUCHI 制作室
GRAPHIC ARTS & EDITORIAL

〒604-0982 京都府中京区錦町東山町1-1-1 三井ビルディング201号

会務報告

十二月理事会

日時 平成十三年十二月十二日(水)

十八時三十分～二十一時

場所 日本山岳会会議室

「出席者」 大塚会長、長尾、村井各副会長、西村、今村、坂井、高原、朴元、高遠、宮下、鈴木、黒川、大野、中村、藤本、河西、松原、鳥居、小川各理事、古市監事、平林、宮崎、宇田川、鰐坂各常任評議員

「委任」 芳賀副会長、内田監事

【審議事項】

一、「二〇〇二国際山岳年」の進め方について (高遠)

当会の取り組みについて、別添資料により検討された。

①国際山岳年日本委員会 (平成十三年十月九日発足、委員長田部井淳子) 委員に大塚会長を追加。

②参加行事は当会としては「会」「委員会」「支部」の三つの切り口より取り上げる。東カラムル踏査、科学委員会探索山行、支部実施の子ども参加行事等が候補。

平成十四年三月末までに参加内容について決定する。

③事業費の分担は各団体とも均等とするよう要求する。 (承認)

二、「日本山岳会の自然保護・環境保全に関する取り組み」の一部変更について (河西)

自然保護委員会で再度検討した結果、タイトルも含め別添資料のとおり変更したい。 (承認)

三、創立百周年記念事業の企画について(その一) (平林)

百周年記念事業企画プロジェクト平林リーダー (平成十三年五月の臨時理事会で設置決定) より運営組織と事業計画概要について、別紙「百周年記念事業への取組」により提案され、意見交換。十二月末までにアイデア、意見を出し来月の理事会に諮る。 (継続審議)

【報告事項】

一、「K2 (南南東リブ) 登山隊」996報告書」に関する裁判の最終判決の会報「山」への謝罪掲載について (西村)

判決 (確定) にもとづき掲載する旨の報告があった。ただし「謝罪文」に経緯等を併記掲載することについては、次回理事会で報告。二、二一一号室の利用 (高原)

百年史編集委員会より要求のあった電話の件は当委員会専用として

て設置、休日(土、日)の利用は検討中、利用の際の名札付けは実施、との報告があった。

三、資料等使用、名義後援許可願について (西村)

信越放送(株)より平成十四年二月三日放映予定の「上高地・四季」(TBS系列)番組の中で、ウェストンの初代レリーフ写真の使用。

四、評議員会、支部長会議の開催について (西村)

評議員会を十一月十七日当会会議室で、支部長会議を十二月一日新高輪プリンスホテルで開催。会務報告の他、名譽・永年会員、また細則見直しの経過説明を行い意見を求めた。支部長会議では、各支部より百周年事業企画について活発な提案がされた。

五、各委員会報告

総務委員会・西村

年次晩餐会は十二月一日、新高輪プリンスホテルにおいて五百二十名(昨年六百十六名)参加のもと開催した。報告会、展示も皆の協力でうまくいった。テールマ

スター制を復活して好評だったが、支部会員が固まる傾向があった。

財務委員会・村井副会長

①四月より十一月末まで累計の会

計報告。順調に推移しているが新入会員勧誘願いもあわせてあった。②平成十四年度事業計画・予算請求書および当年度事業報告・収支報告を別紙書式により、一月三十一日までに提出の案内があった。

集委會・朴元

二〇〇三年に中央アジア(東チベット)のトレッキングを計画中。会報編集委員会・今村

「山」十二月号巻頭は年次晩餐会。遭難対策・学生部指導委員会・黒川、鳥居

①学生部指導委員会と共催で、平成十三年度大学山岳部監督ミーティングを十二月六日午後六時半より、当会会議室において二十一大学(三十二名)の参加で開催。テーマは別紙のように「大学山岳部の遭難事故を考える」「大学山岳部の部員減少を考える」。

②平成十三年年度全国山岳遭難対策協議会報告書を配布。

海外委員会・中村

Japanese Alpine News Vol.2, April 2002への掲載予定記事は別紙どおり。

自然保護委員会・河西

十二月九日「山岳団体環境連絡会」が発足。加盟団体は当会の他、

HATJ、労山、日山協、都岳連、HAJの六団体。

山研運営委員会・小川

山研を「常設のシヨールーム」として、来年度は大いに利用してもらいたい(国際山岳年としても)。

■会員異動

物故

中山昌之(一〇二九九)01・4・19
尾崎良一(一〇九四八)01・4・30
大内米三(三九五四)01・10・23
渡辺 徹(九八三二)01・11・22
鷺見敏一(一〇二九五)01・11・22
魚本定良(五九九七)01・12・1
加藤三雄(九八八九)01・12・20
藤江幾太郎(七五九三)01・12・21
沼田 眞(九一〇五)01・12・30
退会
及川 昭(八六四八)
長谷川耕司(九三四七)
南 康雄(一一四四九)
平澤千穂子(一一九六八)
林 勝重(一二二〇三)
采野 進(一二七五八)

終身会員

小峰頭一(四六四九)
深瀬一男(四九七三)

ルーム日誌

12月 3日
総務委員会

4日 アルパインスケッチクラブ
5日 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ

6日 遭難対策委員会 学生部
10日 図書委員会 自然保護委員会 アルパインスキークラブ

11日 常務理事会 アルパインスケッチクラブ

12日 理事会 97同期会 つくも会 93会

13日 山の自然学研究会

17日 総務委員会 緑爽会

18日 青年部 二火会 00同期会

19日 インターネット小委員会

長期改善計画策定プロジェクト 三水会

20日 科学委員会 青年部 98同期会

21日 集委会 トイレマナー小委員会

25日 自然保護委員会 95同期会

27日 高所登山委員会 アルパインスキークラブ
12月来室者522名

■訂正 一月(六八〇)号一三ページ

「ジニ二段目後部の一節が、原稿と表現が異なっていたので、お詫びして訂正します。これら昨秋の国内における山行と対比して思い出されたのは、昨春、二ヵ月間二人で歩いて来た北欧の旅である」

◆編集後記◆

まもなく創立百周年を迎える日本山岳会ですが、今回、会員が会員を名誉毀損で訴えるということがおきました。裁判記録を読みましたが、「なぜ会の公式発行物に実名の個人批判を書いたのか」「なぜ発行前に止められなかったのか」「なぜ訴訟になる前に話し合い決着できなかったのか」などなど色々考えさせられました。

「K2隊」当時の会長であった村木潤次郎氏から寄せられた「所感」の中の一部に「面談してお互いに議論を尽くし、自分の主張を説明し、相手の立場も理解するという

いわゆる議論と討論の姿勢と努力が不足していたというべきであろう。人間が自然に立ち向かう場合、勝負ではなく、自然の力と己の力との関係把握、自己の力の評価などに基づく駆け引きが重要なのではなからうか。そこに山登りの面白さの一面があると考えている。したがって、山登りを好む人々こそ風評に惑わされず、自ら観察し把握した事実に基づいて自らの判断と決心を定めていただきたいものと思う。これまで、以上のよう

な事情、経緯をご存知ない会員諸兄の憶測、誤解を生じ、一部の方からの中傷も聞こえてくるといった異常な雰囲気を感じられ、大変残念な思いを禁じ得なかった。私は本件裁判同様、この問題を全て終結し、一日も早く正常な日本山岳会に戻って欲しいと願っている。」とあります。若輩ながら私も全く同感です。

この問題に対しては両氏に親しい方、また今月の会報「山」で初めて知った方など、いろいろな方のご意見、ご感想があると思いますが、この問題については今回で「フーサイド」とし、投稿などがありまして、お仕舞いしたいと思います。

楽しいクラブライフのためにもご協力よろしく願います。

(今村 千秋)

日本山岳会会報 山 681号

2002年(平成14年)2月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビュウハウス四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
ホームページ: <http://www.jac.or.jp>
Eメール: jac-info@jac.or.jp
発行者 大塚博美
編集人 今村千秋
印刷 株式会社 双陽社